

月刊

# いっしょのとも

第七卷

二月号

## 人間仲間と犬仲間

最近

人間仲間での

付き合い方を

知らない人間が

増えているように

犬仲間での

付き合い方を

知らない犬が

増えているようだ

## 現代人とは

ミーハーかと

思うほど

興味は

広いのに

何故か

視野が

狭い人たち

## 心の安定と通心

いま

子どもたちも

人と

心を通わすことの中に

心の安定を

求めなくなつて

来た

# 人生を考え直して

## みたい人は(一二六)

『聖書』解説(二)

先月号で予告しましたように、これから先、マタイによる福音書の五章、六章、七章にある、いわゆる「山上の垂訓」と呼ばれる部分を解説していきます。

なお、聖書はもとも旧約聖書がヘブル(ヘブライ)語で、新約聖書がギリシャ語で書かれましたが、その後ラテン語をはじめさまざまな言語に訳されました。

私が、いま主に使っていて、今後本シリーズで訳語をお世話になる聖書は、いのちのことば社から出版されたもので、訳は日本聖書刊行会『新改訳聖書』によっていると書かれています。聖書は、この他にも幾つか古本屋さんで買ったものがありますが、その中の一つに「国際ギデオン協会より贈呈」と書かれた新約聖書があります。これは、便利なことに、英語訳と日本語訳が対にされています。英語は何とか読めますので、日本語であいまいな所は、英語を参照するようにしています。なにしろ、ヨーロッパにはキリスト教の長い伝統がありますが、日本にはキリスト教的発想はありません。ですから、訳語

も的確にはいかないのです。その点、英語を見れば、ああそういうことか、と思うことがよくあるのです。

では、マタイ福音書第五章の最初から始めます。

これまで通り、引用した文は四角で囲んで示します。

その後で解説をしていきます。

一 この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに來た。  
二 そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。  
三 「心の貧しき者は幸いです。天の御国(みくに)はその人のものだからです。」

まず、はじめの「この群衆」とは、この文のすぐ前の文を引きついで言ったもので、キリストに従ってきた群衆のことです。

第二節には、難しいところはありません。でも、第三節は、とても分かりにくいと思います。

先ず、この中の「心の貧しき者は幸いです。」ですが、皆さん、これが何のことかお分かりでしょうか。

最近、日本でも経済的には豊かになりましたが、それと反比例して心は貧しくなったと言われています。とこ

るが、ここでは、そうなることが善いこと、幸いなこととされているのでしょうか。

そうではありません。二つの場合では「心が貧しい」という言葉の意味する内容が異なるのです。なお、ルカ伝ではこのことばは、「心」が抜け落ちていて「貧しい者は」となっています。おそらくイエスはこう言われたのではないかと、聖書学者たちは推測しています。

まあ、それは私にとっては、どちらでも大した違いはありません。大切なことは貧しいということの意味です。

では、貧しいとはどんなことなのでしょう。一般には、貧しいとは経済的なことを言います。心について言う時は、私のことばで言えば「人の心の感じるこころ」のことをいいます。でもここでは、それ以外に含まれる意味があるのです。

私のつくった「人間精神の心理学モデル」にそくして検討してみたいと思います。

話が難しくなつて恐縮ですが、このモデルを復習しておきたいと思います。このモデルでは、人間の精神は、基本的に、自分を知ることを目指して、より善く生きようとする「自己」と、法を目指して、より善く社会的であろうとする「他己」から成り立っているとします。人間はこの「自分を主張しようとする心」と「他者と心を

通わそうとする心」の間でバランスを取りながら生きていくのです。そして、この自己と他己には、それぞれ、五種類の働きの違った領域があるとします。それらは、

ずいしき（精髓（煩惱蔵識） - 神髄（如来蔵識））、  
こころ（情動・感情）、 からだ（感覚・運動）、  
あたま（認知・言語）、 たましい（自我・人格）です。  
これらの対の前者が自己に、後者が他己に属します。また、 髄識は、無意識あるいは潜在意識で、意識することはできませんが、 から は意識できます。

さて、ここでいう「貧しい」とは、このモデルで言えばどこが、どうなるときなのでしょう。

それは、「自己」が貧しいということなのです。自分を主張しようとする心が貧しいのです。少ないのです。具体的には、自分の情動（欲望や喜怒哀楽など）が制御されていて、欲望を貪欲に追求することがないか、あるいは追求することができない状態なのです。欲望には、食欲（物欲・金銭欲も含む）、性欲（子孫繁栄欲も含む）、優越欲（名誉欲・権力欲も含む）などがあります。こうした欲望が満たされないうち、普通は貧しいということなのです。ここでもそのことを言っているのです。

自己が貧しいのは、欲望だけではありません。感覚・運動領域でも、 認知・言語領域でも同様です。前者

は運動技能が優れたり、芸術的に高い達成を為したりすることですし、後者はよく勉強して、知的に高い業績をあげることです。科学や文学などでノーベル賞のような賞をもらったりすることです。

こうしたことができないことが、貧しいことになりません。それは、自己を追求するとき、自分の思うとおりにならないということです。

では、なぜ思いどおりにならないことが、幸せなのでしょう。ここが、普通では理解できないところだと思います。

実は、人間は「自己」を追求することが思いどおりになるほど、自己が肥大して驕慢になってくるのです。自分に何でもできるように思ってしまうのです。

現在の日本人がそうなっています。経済的に発展することばかりを目指してきて、それが達成されるにつれて自己が肥大してきたのです。そしてますます、自己の欲望を追求するようになっていきます。

それは、他己と自己のバランスがどんどん崩れていつているということなのです。社会性や人の心を思いやることが犠牲にされて、自己が追求されていくということなのです。極端に言いますと、他者を否定しても、つまり他者を殺しても、自己を追求していくということなのです。

その典型的な例は、最近では、オウム真理教による無差別大量殺人なのです。

こうして自己が肥大し、自己が絶対化して来ますと、他己は相対的に弱体化してしまいます。私のモデルでは如来さま（神さま）は他己の髓識、つまり神髓に宿られているのです。なのに、他己が弱体化しますと、この神髓は当然働かなくなってしまうということになります。ということは、如来さまから遠ざかることを意味するというわけです。

さて、本文にかえて、貧しいことが幸せな理由が次に、述べられています。それは「天の御国（みくに）」はその人のものだからです。」ということばです。

これがまた、なかなか難しく、理解できません。ある解説書では、「天の御国」を天国と考えています。つまり、来世において天国に行けるからだと言っているのです。これまでのキリスト教の教えでは、普通はそう考えるのだと思います。

しかし、私はそうは思いません。これまで書いて来たことから、もうお察しかもしれませんが、天の御国は、来世で行けるところではなくて、私たち一人ひとりの心の中にあるところなのです。

心のどこにあるかといえ、既に述べましたように、

他己の無意識である神髄にあるのです。

では、そこへ至るにはどうすればよいのでしょうか。そこは無意識のことですから、意識して直接そこへ至ることはできません。どうするかと言えば、意識してできることを重ねて、徐々にそこへ至る以外に方法がないのです。それには時間がかかります。修行がいるのです。でも、残念なことに、そのことをキリスト教ではあまり重視してきませんでした。

では、修行するとはどんなことでしょうか。そのためには、まず、自分の限界を自覚し、自己への執着を捨てなければなりません。

本誌のもう一つのシリーズである「釈尊のことば」で平成六年五月号で取り上げました法句経（八八）を、歌にして示しますと、次のようになります。

賢きは 欲楽捨てて 一物も もつことなくて  
自らの 心の汚れ 捨て去って 己を清め  
妙楽をうる

この歌では、天の御国に至ることを妙楽をうるとしていますが、そのためには、欲楽を捨てて、一物ももたず、心の汚れつまり執着を捨て去らなければならぬことを歌っています。

釈尊も言われますように、妙楽を得る（天の御国に至

る）ためには、欲望や娯楽を捨て、一物も持たず、執着を捨て去ることが必要なのです。でも、自己が肥大した人ほど、つまり、名利を得たり、その他の欲望の追求が自由に出来る人ほど、こうなることは不可能に近くなっているのです。逆に言いますと、そうしたものを持たない人、ここで言います「心の貧しき者」ほど、自己への執らわれは少ないので、天の御国に至るのに、より近いところにいると言えるのです。

でも、貧しい者が必ず天の御国に至るかと言いますと、そうはいきません。一つの有利な条件を持っていますが、それだけでは不十分なのです。

そのためには、キリスト教で言いますと、後にも出てきますが、お祈りがいるのです。先程の歌ですと、己を清めることが必要なのです。

では、どんなメカニズムで、それができるのでしょうか。実は、私たちが煩惱に突き動かすものは、如来さまとおなじように、無意識のもう一方の自己に宿る精髄なのです。それは、生命としての私たちの存在をより確実にしようとする働きです。しかし、そればかりを追求しますと、如来さまは否定的にのみ働きかけて、私たちが死へと時を刻むのです。逆に自己を否定し、自己を滅するとき、如来さまが輝き出、神の国が実現するのです。

## 自作詩短歌等選

### 無上の大楽

現代人  
苦しきことは  
逃避して  
易きに流れ  
欲望の  
満足ばかり  
追い求めいる  
苦しみを  
伴う精進  
重ねたら  
無上の大楽  
訪れるのに

### 愛情

愛情は  
自他を  
バランスさせるもの  
人は自己（エゴ）に  
傾きやすいが  
自他の  
バランスのよい人は  
他己に合わせて  
自己を抑える

### 賢者は動ぜず

法句経（八三）  
高尚な  
人たちどこに  
いようと  
執着をする  
ことがない  
快樂欲して  
喋らない  
楽しいことに  
遭おうとも  
苦しいことに  
遭おうとも  
賢者動ずる  
色がない

### 理念のない時代

今は  
理念の無い  
時代  
大勢の人が  
言うことが  
よいこと  
三人寄れば  
文殊の智慧なの？  
**損得と善悪**  
損得  
好き嫌いは  
自己の  
論理  
善悪  
正邪は  
自他統合の  
論理

### 自己受容

自己を受け入れる者が  
他者を受け入れることができるという

では

自己を受け入れるとは  
どんなことなのか

それは

自己の全てに満足できる  
ということ

それは

自己への執らわれを  
捨てるということ

それは

いつでも  
安心して

死ねるということ

### 束縛を解きほぐす

法句経（八九）

正しくも

覚りのための  
ことがらを

心に修め

執着と

貪り捨てるを

喜びて

煩惱滅ぼし

尽くしなば

現世において

はやすでに

全ての束縛

解きほぐしけり

### 母親の自己中心

一昔前は

子どものための

育児書が

よく売れた

でも今は

母親自身の

悩みを解消する本が

よく売れている

### 非難称賛に動ぜず

法句経（八一）

風により

一つの岩の

揺るがぬごと

賢者は非難

称賛に

毫も動ぜず

びくともしない

### 真の喜び

現代の

日本人に

欠けたもの

それは

抜き差しならない

苦しみ

そうした

苦しみの

ないところに

宗教はなく

真の喜びも

ない

# 自作随筆選

## 援助を求める心

一月十八日（木）の朝日新聞に、小田実氏が「これは『人間の国』か」と題する記事を載せていました。同氏は、西宮市に在住していて、関西大震災に遭遇したようです。

この記事で同氏は、震災復興への国の政策が不十分だと抗議しているのです。義援金もたいしたことなく、ボランティアも少なくなってしまう現在、国の政策としてもっと援助してくれるべきだというわけです。これは、一見、正当な主張のように思えますし、同氏の気持ちもよく分かるのですが、しかし私は、この文を読んで、ここに現代人の無意識のうちにもつ自己中心性を感じるのです。

現代人は、自分は助けなくても、あるいは助けたとしてもこれだけ助けてやったのだから、ひとが助けてくれるのが当たり前だと思っていると思うのです。もっと助けてくれて当然だと思っっているのです。

この自己中心的な感覚は、生活物資一つをとってみて

も言えることです。現代人は、自分で自分の生活物資を作ることは殆どありませんので、他人の作ったものを買うわけですが、その購入する物資は、自分がお金を払うのだから、当然のこととして、手に入れることができるのだと考えています。その物が自分の手に入るまでに、どれほど多くの人の手がかかっているかを思うことは殆どありません。

さらに、老人にしても、重症の病人にしても、あるいはその他の経済的・社会的な弱者にしても、自分が受ける取る年金や援助の金やサービスも、さまざまな料金の割引も、みんな自分にとっては当たり前だと思っっているのです。つまり、この場合にもひとから愛や援助をもらうことばかりを考えているのです。社会に迷惑をかけて申し訳ないという気持ちは殆どありません。人間は、他者の援助なしでは生きられません。私は、成人して自分で他者を援助できてた人ができなくなった時、いつでも喜んで死んでいけるようにならなければならない、と思っっているのです。

ですから、他者を援助できないで生きていられる時は、どこまでも他者の援助に感謝しなければなりません。援助を当然だと思っってはならないのです。助けるのは社会の進歩、助けられるのは社会の退歩なのです。



## 釈尊のごとば（四三）

法句経解説

（一五八）先ず自分を正しくとのえ、次いで他人を教えよ。そうすれば賢明な人は、煩わされて悩むことがないであろう。

先月号の後記に「今、宗教家が、孔子と同じように、自分は出来もしないことを人に説いています。」と書きましたが、この偈はこのことと同じことを言っています。

いま、世襲の大多数の僧侶だけではなく、新宗教の教主やその布教者も、オウム真理教の麻原彰晃被告をはじめとして、自分が出来もしないこと、体験のないことを説いています。つまり、自分を「正しくとのえ」ていないのに、他人を教えているのです。

たとえば、麻原彰晃被告の修行法で有名になりました空中浮遊ですが、この地球上で何らの仕掛け無しで、自然現象として、じっと人体が空中に浮いているというようなことはありえません。物理学原理に反しています。でも、解脱者は空中浮遊ができると、ものの本に書いてあるのだと思うのですが、それを知って、自分も解脱していることの証として、跳び上がった瞬間をカメラでと

って、人に示すのです。

私の体験では実は、空中浮遊とはイメージの中で仏と一体になって（入我我入して）、自分がずっと宙に浮いていると実感することなのです。しかし、物理的にみますと、台座に座って瞑想している姿があるだけです。

もう一つ体験がなくて教えている例をあげますと、道教の不老長寿の教えがあります。道教の始祖とされます老子は、「無為自然」を体得したとき、すでに不老長寿に至っていたのです。実際に長生きしたとされていますが、そんな物理的な命の長さが問題なのではないのです。その境地に達すれば、一日生きれば、永遠に生きたと実感できるのです。しかし、その体験のない人にとっては、実際に少しでも長生きすることが、不老長寿だと思ってしまうのです。

私はかつて次のような歌を作りました。

能才な えせ宗教家 はびこりて

宗教ますます 滅びゆきけり

人間は能才であればあるほど、こころに垢を付けます。この偈でいえば「自分を正しくとのえる」ことから、ますます遠ざかるのです。ですから、能才であればあるほど、それだけ多くの「自分を正しくとのえる」修行がいるのです。能才な人にとっては一見無用と思える、

自分を滅した、修行がいるのです。しかし、能才な人は、自分の高い能力を使うことに忙しすぎて、それを使うのをやめて、自分を覗き込むことには耐えられません。自分の能力を使うときほど、効果がはつきりしないからです。

宗教は、あるいは、この人生は、実際の体験、実際の生活から成り立っています。体験や生活を遊離した宗教や人生はありません。

能才で、自分を正しくととのえることのない宗教家は、他者の体験や生活を書いたものを読んで、あるいはそうした体験や生活をした人の話を聞いて、あたかも自分が体験したかのように、人に教えるのです。それを何冊もの本にしますし、金儲けも上手にします。

しかし、めったにいませんが、賢明な、自分を正しくととのえた宗教家は、金儲けや自分が有名になるような俗なことに、煩わされて悩むことはないのです。

(一五九) 他人に教えるとおりに、自分でも行なえ  
。自分をよくととのえた人こそ、他人をととのえるであろう。自己は実に制し難い。

「自己は実に制し難い。」という部分を除けば、これ

は、この前の偈とほとんど同一のことを言っています。

出だしの「他人に教えるとおりに、自分でも行なえ」で思い出しますのは、今の学校の教師のことです。

学校現場はいま、荒廃しているように思えます。不登校もいじめ、自殺も増えこそすれ、減ってはいないように思えます。その原因はどこにあるのでしょうか。私は、子どもたちが、親も教師も仲間も信じなくなってきたからだと思っています。教師を信頼しなくなってきたからではないかと思うのです。

先程も、ニュースで教師は生徒との信頼関係をきずくようにすべきだと、ある教師が研究大会で発表したと報道していました。教師自らも、お互いに信じることが大切なことを自覚していると思うのです。

では、教師が自ら他者を信じているのでしょうか。この偈で言いますように「他人に教えるとおりに、自分でも行っている」のでしょうか。私は「否」と言わざるを得ないと思います。

いま、おとなが信じるものを失っています。それは究極的には信仰を失ったということです。自己を超えたものを信じるのが出来なくなってきました。信じるものは、自己の欲望や自己の名利になっているのです。

その限りで宗教を信じているのです。自分を捨てて、

他者を信じることはできなくなってしまう。例えば、私が解説しています、老子にしる、釈尊にしる、キリストにしる、すばらしい教えを説いています。しかし、これらの教えを護り、広めるべき立場にいる人たちでさえ、殆ど信じていないように思えます。第一、間違いない理解できている人はめったにいません。実は、だからこそ、信じなければならぬのですが、自己が肥大した現代人にはそれができないのです。

最後の「自己は実に制し難い。」ということばですが、人間は、自己をよくとのえることに比例して、自己を制することができるのです。自己を制することこそ、人格完成の最終目標だといってもよいほどです。

なお、自己にうち克つことがいかに難しいかについては、それをうたった偈(一〇二)(一〇三、一〇四)を既に、第五卷(平成六年)九月号で解説しています。ご参照下さい。

(一六〇) 自分こそ自分の主である。他人がどうして(自分の)主であろうか? 自己をよくとのえたならば、得難き主を得る。

この偈には、特に難しいことばはないと思います。し

かし、深い真理を述べているように思えます。

「自分こそ自分の主である。」とは、人間はどこまでも主体的存在であることを述べています。私たちは、それぞれ異なった環境の中に、異なった個性をもって産み落とされます。きわめて恵まれた環境と個性をもって生まれてくる人もいれば、逆に、不遇な人もいます。しかし、生きていく主体は、環境をなす親や兄弟ではなく、まして地域社会や国家ではありません。どこまでも自分自身なのです。

ということばは、人間は他の動物と違って、与えられた、ハイデッガーのことばで言えば「贈られてある」ままの生を送るわけではありません。私自身も、若い頃自分の生まれの不遇さを嘆き悲しみ、死を思ったこともありましたが、ありがたいことに、そうだったからこそだと思えますが、今は、「得難き主を得る」ことができました。それは、そうした救われぬ自分を克服したいために、「ひたすら自己をととのえてきた」結果なのです。

では、得難き主とは何なのでしょう。それは、私の神髄に宿っておられる「如来さま」です。自己を磨いていけば知らないうちに、仏さまが自分の中に輝いてくるのです。それを釈尊は、ご臨終近くに、「自らを灯明として、法を灯明とせよ」とおっしゃったのです。

後記

- 一、ぼつぼつ梅のつぼみがふくらみはじめています。雪はちらつきますが、もう春の気配をそここに感じます。
- 二、先日、全国自由同和会徳島県連阿波麻植名西郡連合会の郡連婦人部役員学習会で講演させていただきました。四十人ほど出席されましたが、熱心に聴講して下さいました。ありがとうございました。
- 三、話の内容は、「いじめ雑考」と題し、いじめの問題を取り上げさせていただきました。
- 四、いじめとそれによる自殺や不登校は、依然として増え続けているようです。文部省をはじめ（平成七年三月十三日いじめ対策緊急会議の最終報告）、いろいろな人がいじめについて対策を提案しています。
- 五、その「いじめ対策緊急会議」の最終報告で、重要だと思われることをまとめますと、いじめは人間として許されない行為であることを児童・生徒に分からせる、それには他人の痛みを分からせるようにしなければならぬ、そうした他人を思いやる心は、基本的には家庭で育つものである、ということになります。
- 六、でも、このぐらいのことは、常識的に誰でも知っていることのように思われます。
- 七、ある人が、二月九日付けの朝日新聞の論壇欄に「い

じめの『隠れ加害者』になるな」と題していじめ対策を提案していました。その提案は、いじめの組織的予知体制を構築するために、教諭は学級などの組織を通じて教室を管理しなければならぬ、としています。驚きました。子どもたちは、大人から愛をもらえず、管理されて、大人を信じなくなっているのです。

八、いま、的確な対策として、大人に求められているものは、大人が自己を制すること、他己を取り戻すこと、愛を取り戻すこと、信じるものを取り戻すこと、子どもを信じること、子どもに大人の価値を体験させること、そのために、大人も子どもも共に修行すること、です。

月刊 こころのとも 第七巻 二月号 (通巻 七十四号)	平成八年二月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひびきのさと）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	